

助動詞を学ぼう①

☆2年生からは新たに助動詞を学習していきます。学校が始まる前に予習をしてみましょう。

※「完全マスター古典文法」を参考にしながらやってかまいません。

○助動詞「ず」（完全マスター古典文法51ページ）

①意味 【 ー ー】

例 走らず ー 走ら【 ー】。

②活用

| | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 |
| | | | | | |

③活用語の【 ー】に接続

④次の傍線部A～Dの助動詞の活用形を答えよ。

・二、三日あけAず、御覽ぜBぬ日なし。 A【 ー】 B【 ー】

・この川、飛鳥川にあらCねば、淵瀬さらには変はらDざりけり。 C【 ー】 D【 ー】

○助動詞「けり」（完全マスター古典文法46ページ）

①意味 【 a ー】、【 b ー】

※【 a ー】の意味で使うことが多いので、まずはこちらの意味を覚えましょう。

詳しい説明は授業で行います！

例 走りけり ー 走ら【 ー】

②活用

| | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 |
| | | | | | |

③活用語の【 ー】に接続

④次の傍線部A～Dの助動詞の活用形を答えよ。

・思ふさまに吹きAける、世にたぐひなく、めでたかりBけり。

A【 ー】 B【 ー】

・仁和寺にある法師、石清水を拝まざりCければ、「げにただ人にはあらざりDけり。」と思して、

C【 ー】 D【 ー】

大和物語 姨捨①

本文

- ①信濃国に更級といふ所に、男住みけり。
- ②若き時に、親は死にければ、をばなむ親のごとくに、若くより添ひてあるに、この妻の心憂きこと多くて、この姑の、老いかがりてゐたるを、常に憎みつつ、男にもこのをばの御心のさがなく悪しきことを言ひ聞かせければ、昔のごとくにもあらず、おろかなること多く、このをばのためになりゆきけり。
- ③このをば、いといたう老いて、二重にてゐたり。
- ④これをなほ、この嫁、所狭がりて、今まで死なぬことと思ひて、よからぬことを言ひつつ、「持ていまして、深き山に捨て給ひてよ。」とのみ責めければ、責められわびて、さしてむと思ひなりぬ。
- ⑤月のいと明かき夜、「嫗ども、いざ給へ。寺に尊きわざすなる、見せ奉らむ。」と言ひければ、限りなく喜びて負はれにけり。
- ⑥高き山の麓に住みければ、その山にはるぼると入りて、高き山の峰の、おり来べくもあらぬに、置きて逃げて来ぬ。
- ⑦「やや。」と言へど、いらへもせで、逃げて家に来て思ひをるに、言ひ腹立てける折は、腹立ちてかくしつれど、年ごろ親のごと養ひつつ相添ひにければ、いと悲しくおぼえけり。
- ⑧この山の上より、月もいと限りなく明かく出でたるをながめて、夜一夜、寝も寝られず、悲しうおぼえければ、かく詠みたりける、
- ⑨わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て　と詠みてなむ、また行きて迎へ持て来にける。
- ⑩それより後なむ姨捨山と言ひける。
- ⑪なぐさめ難しとは、これがよしになむありける。

現代語訳

- ①信濃国にある更級という所に、(一人の)男が住んでいた。
- ②若い時に親は死んだので、伯母が親のように、若い時からそばについて(世話をして)いたが、この(男の)妻の心は困ったところが多くて、この姑が年老いて腰が曲がっているのを、いつも憎んでは、男にも、この伯母の御心が意地悪で不都合だということと言ひ聞かせたので、(男も)昔のとおりでもなく、この伯母をおろそかに扱うことが多くなっていた。
- ③この伯母は、たいそうひどく年老いて、腰が折れ曲がっていた。
- ④このことをやはり、この嫁は厄介がって、今までよくまあ死なずにいるものだと思って、(男に)よくない告げ口をしては、「連れていらつしやって、深い山にお捨てになってくださいよ。」とばかり(言つて)責め立てたので、(男は)責め立てられるのに閉口して、そうしてしまおうと思うようになった。
- ⑤月のたいそう明るい夜、(男が)「おばあさんよ、さあいらつしやい。寺でありがたい仏事をするそうですから、お見せいたしましよ。」と言つたので、(伯母は)このうえもなく喜んで(男に)背負われてしまった。
- ⑥(男は)高い山の上にも住んでいたの、その山にはるぼると入りて、高い山の峰で、下りてくることができそうもない所に、(伯母を)置いて逃げてきた。
- ⑦(伯母は)「これこれ。」と言うけれど、(男は)返事もしないで、逃げて家に帰ってきて(あれこれ)思っていると、(妻が伯母の)悪口を言つて腹を立てさせた時は、(自分も)腹を立ててこうしてしまつたが、長年、親のように養ひ養ひして一緒に暮らしてきたので、たいへん悲しく思われた。
- ⑧この山の上から、月もまことにこの上なく明るく出ているのを、(男は)物思いにふけりながらぼんやり見やつて、一晩中、眠ることもできず、悲しく思われたので、このように詠んだ(歌)、
- ⑨私の心は慰めようにも慰められない。この更級の、伯母を捨ててきた山に照る(美しい)月を見ていると。
- と詠んで、また(山に)行つて(伯母を)迎えて連れ帰つた。
- ⑩それから後、(この山を)姨捨山と言つたのである。
- ⑪「なぐさめ難い」と(いう時に姨捨山を引き合ひに出すの)は、このようないわれによるのであつた。

大和物語 姨捨② 内容の整理

① 次の空欄に、本文・現代語訳を参考にしながら適当な言葉を入れよ。

1 昔信濃の国の〔①〕という所に、親に先立たれ、〔②〕が親代わりとなつて育てた男がいたが、その男の〔③〕は年老い〔②〕を疎ましく思い、男に〔②〕の悪口を言い聞かせ、最終的には深い〔④〕に捨ててくるように夫を責め立て、男もそうしようと思うようになった。

2 月が明るい夜、〔⑤〕を口実に誘い、かつぎ出し、〔④〕の峰に〔②〕を捨てたが、長年親のように一緒に過ごしてきたので、悲しく思った。

3 一晩中〔④〕の上から〔⑥〕が明るく出ているのを見て、悲しみを歌に詠み、また〔④〕へ〔②〕を迎えに行った。それからこの〔④〕を〔⑦〕と言うようになったそうだ。

② 本文②「この姑の、老いかがまりてみたる」とあるが、これとほぼ同じ意味を表す一文の初めの五字を抜き出せ。(読点を含む。)

【 / / / / / 】

③ 本文⑦「いと悲しくおぼえけり。」とあるが、それはなぜか。次の中から適当なものを一つ選べ。

- ア 幼い頃からおばの言動を疎ましく思い山に捨てたが、一緒に過ごした思い出がふとこみ上げてきたから。
イ ひどいじめから妻を守るためにおばを捨てたが、それでも親代わりのおばとの別れはつらかったから。
ウ おばを悪く思った妻の策略に気付き、親代わりのおばを捨てたことを後悔しても、なす術がないから。
エ 妻から悪口を聞かされ立腹するあまりおばを捨てたが、親のように育ててもらった恩に思い至ったから。

【 / / / / / 】

文法の確認

① 次の傍線部を文法的に説明せよ。

例 男①住み②けり。

| | ① | 【 | マ行四段活用 | 連用形 | 【 | ② | 【 | 過去の助動詞 | 終止形 | 【 |
|-------------------|---|---|--------|-----|---|---|---|--------|-----|---|
| ・ 若き時に、親は①死に②ければ、 | ① | 【 | | | 【 | ② | 【 | | | 【 |
| ・ 下り来べくも①あら②ぬに、 | ① | 【 | | | 【 | ② | 【 | | | 【 |

② 本文中に助動詞「けり」が何個あるか、答えよ。(活用されているものもすべて含める。)

【 / / / / / 】

※ヒント 「助動詞を学ぼう」プリントを参考にしながらやってみてください。

できるだけすべてを埋めた状態で学校再開後の授業に持ってきてください。
授業の中で解答を確認する予定です。